

道産馬

昭和初期の工事では、開拓期の農作業でも活躍した馬が重要な役割を果たしていました。人が掘り、馬が引く方法は「人力積込馬トロ運搬」と呼ばれ、十勝川治水の原動力となっていました。いわゆるドサンコ（道産子）は、乗馬には適さなかった一方で、頑丈で険しい道を乗り越える力強さを持っていたことから、明治の開拓者は「一戸に一頭」ほどは飼育していたともわれています。

明治15年の十勝の馬はわずか378頭。その後、フランスより農用種馬「ペルシュロン」の輸入を契機に馬産改良が進み、農家戸数の増加、耕地面積の拡大とともに、大正6年には2万頭を超えました。

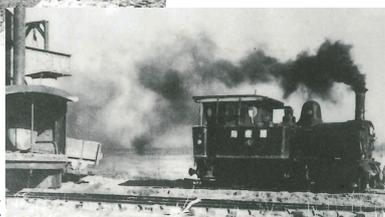
十勝川の治水工事には、こうした農作業に従事した馬が多く駆り出されていたのです。

写真で見る河川工事の今昔

人間と馬による方法から大正9年にエキスカベータが登場し、川の切り替え、築堤の盛土に大きな威力を発揮しました。十勝川では昭和6年に着手した統内新水路の切り替えが、42tエキスカベータと20t蒸気機関車のセットで行われました。昭和12年9月の洪水により自然通水したが、掘削は43年まで続けられました。



42t エキスカベータ



20t 蒸気機関車

昭和30年代にはショベル、ドラグラインなどの掘削積込機械が登場しました。また、蒸気機関車に代わり、軽量で扱いが容易なディーゼル機関車も登場しました。ショベルにはトラクター・油圧式・パワーなど、用途や目的に応じて大小多くの機種があり、現在も活躍しています。



油圧ショベルによる掘削積込



油圧ショベル法面仕上

エキスカベータと機関車

西暦

明治元年



イレネー号（※）

大正元年



ドサンコ（※）

大正12年 治水事業の開始

昭和元年

人と馬

人間が掘り、馬が引く方法は、戦前戦後を通じて最も長い歴史を持っていますが、土木機械の登場で、昭和30年代前半で姿を消しました。



大正初期の帯広競馬場（※）



人力積込、馬車運搬



人力積込馬トロ運搬



人力法面仕上



ドラグライン掘削

終戦

大型土木機械

終戦後登場した大型土木機械の代表はブルドーザです。用途に応じて改良され掘削、運搬、敷き均し、転圧など活躍の場は広く、現在も活躍しています。



ブルドーザによる法面覆土

平成元年

令和元年

令和5年 治水事業100周年